

♪ シニア便り ♪



第 8 号 (2006年2月発行)

発 行 北海道シニア吹奏楽団 事務局

編 集 『シニア便り』編集部

パート別リレーエッセイ

クラリネット編 (二)

島田 治子

若い頃から……と始まったリレーエッセイ。早くも二回目からランダムになったようです。

今までに投稿された方々の自己紹介エッセイは、吹奏楽との出会い・経歴が詳しく、楽しく書かれていましたが、そういう経歴（小学校の鼓笛隊でベルリラをやった以外は）が無い私は、何を書いているのか分かりません。

中学時代はグループサウンズに、高校・短大時代はフォークソングに熱中し、音楽の授業では、強制的に聴かされたクラシックに欠伸をしていた私です。子供が中学で吹奏楽部に入ったのをきっかけに、度々小さな演奏会に足を運ぶようになり、家にもCDが増えていきました。要するに、私にとって吹奏楽とは、聴くもの・観るものだったのです。そんな私が、楽器を手にステージに上がっているなんて、夢のような話です（満足な音も出せていないというのに）。

「ヤマハ」で管楽器を教えていらつしやうした林先生のもとに通い始めて一年くらい経った頃、先生から「僕が団長をやっているバンドがあるんだけど、良かったら来てみませんか」とお声を掛けていただきました。「冗談かと思いました」。

「私なんか、とても無理です」。

「島田さんは、吹奏楽に興味ありそうだと思うんだけどね。」

「興味は、すごくあります。でも難しそうで、私にはとても……」

「大丈夫。吹けない所は吹いている真似をして、音を出さなければいい……」

初めて練習に参加した日の感激は、忘れられません。チップスで最初に出した音が、他の楽器と融け合って耳に入ってきた時、今まで感じたことがない、心地良い風が全身を吹き抜けていきました。その後の「タンホイザー序曲」では、白い音符しか吹けず、あとはただクラリネットを握りしめていただけ。

それなのに、虫のいい話ですが、私はずっとこの場所に居たいと思つたのです。こんな私を、当時からずっと暖かく迎えて下さっている林団長、中村先生、団員の方々に、あらためて深く感謝申し上げます。

「音楽とは、音を楽しむこと。楽しくなかつたら音楽じゃない。『シニア』でやっていて楽しいと感じられたら、ここに居る資格があるんだよ。」

林先生のこの言葉に背中を押され、雑音になりそうな所は消音で、なんとか迷子にならないように付いて行きます。これからも、どうぞ宜しくお願いします。

新入団員からのあいさつ

『吹奏楽と私』

ホルン 清野 雄二

吹奏楽との出会い、それは昭和四十三・四年の頃、当時私は小学校高学年でした。ある日クラブ活動の一環として、新しく『音楽クラブ』が出来ました。この事でしたが、当時私は音楽には興味が無かったのですが、指導にあたった池田先生の「入ってみないか」と呼びかけてクラブの門をくぐってみました。

入ってみると、想像していた鼓笛隊のような所と違い、今まで見た事の無いキラキラとした金管楽器、墨で出来ているようなクラリネット等々、その時めぐり会つたのがトランペットでした。当時、身の回りの楽器と言ったらリコーダー、ハーモニカ位だったので当時の私にとつては夢の様な出来事だったのを覚えています。それからと言うものはブラス三味の日々、特に高校では「ブラスフェスティバル」「学校祭」「コンクール」「潮祭り」等々あらゆる催しに参加していました。しかし、社会に出てからは『吹く』場を失い数年が経ち、ある市民バンドに所属したこともありましたが、平日行われている練習に参加するのも難しく短期間で脱会、仲間でデキシーバンドを組んだこともありましたが転勤等でメンバーが少なくなり自然消滅。

それから数十年が経ち、又『吹く』場

を求めている時に『北海道シニア吹奏楽団』というHPが目になりました。まだシニアの域では無いよなと思いがら内容を見ていたところ、若者からシニアまで、練習日は日曜日、目指すは年一回の定期演奏会という所に興味を惹かれいざ練習見学。久しぶりに味わう練習風景と場の雰囲気を感じし入団希望、「ホルンパート」で希望したのですが「自己所有の楽器はありません」と言うので、まだ事務局から入団決定が出ていない私に中村先生が「私の楽器を貸すので持ち帰っても良い」。この一言が嬉しく猛練習開始。元々はラッパ吹きなので、ホルンは三十年程前に短期間吹いた程度でした。

しかし、信頼に応えるためにも二月後の『定期演奏会』には何とか仕上げようと、学生時代に戻った気分になりホルンを吹く日が続き演奏会当日、忘れていたステージの感触が甦り、「シニアに入団して本当に良かった」と心から思いました。

仲間に加えて頂いた『北海道シニア吹奏楽団』に感謝するとともに、これからの団の発展に協力して行きたいところから思っています。

『第十二回定期演奏会の司会を務めて』

岡本 紀代子

六月の末頃、バンドの仲間である林さんから「シニアの定期演奏会の司会をしてくれませんか？」というお話があり、

「少し時間を下さい」とお願いし、「どうしよう」と悩みました。第九回から三年続けて定演は聴かせて頂いておりましたので雰囲気は分かっていたのですが、年に一回の大切な演奏会を自分がヘマをして壊してしまつたら取り返しがつかない事になる。その一点を考へ続けて決心がつきませんでした。が、義妹に「何の為にアナウンスの勉強をしたの? そういう事をやりたかつたからでしょう」と言われ迷いは吹き飛びました。すぐに林さんに返事すると、「七月三十一日にパークゴルフ大会付き呑み会があるので参加しませんか?」とお誘いがありました。司会を務めるからには少しでも早く、団員さんの顔と名前を覚え親しくして頂いた方が和やかに仕事ができ、自分の緊張感も弱まるだろうと思ひ参加させて頂きました。初めの思いなど忘れ、気分はすっかり皆さんの仲間になりパークもジンギスカンも堪能しました。楽しかった。

いよいよ打ち合わせが始まると原稿は九十%出来ていて、あーこれは本読みになつたらお客様の心をステージに引き付けるのが難しいかもしれないと感じました。でも、子供とのインタビュートと曲当てクイズがある、ここではアドリブで良い、自分らしさを出すのはこの場面だ!!

子供とのインタビュートでは、せつかく出会った音楽の道、これを手放す事無く人生の良きパートナーとして上手く生涯付き合つて欲しいもの、という気

持ちで臨みました。すると、今の子供って大人ですわね。将來音楽の道に進みたい」とハッキリと言った子、「職業にしない」と言つた子。そんな答へを期待していたとはいへ、ズバリ返つて来たのには本当に驚きました。

平静になりこの日を振り返ると反省点があります。十二回の定演の中で一番良い演奏だったと中村先生がおっしゃっていて、そのような演奏会に、「一緒にさせて頂けたことを嬉しく思うと共に、ご指導下さった実行委員の皆様と暖かく接して下さった団員の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございます。」

川 柳

- ◎ 希望者を ふるいにかけて 夢を見る (一生)
(そんなに来るわけないな?)
- ◎ 高齢化 笛吹童子も 寿命伸び (一生)
(幾つまで吹けるかな?)
- ◎ 身体によい 音にも良いと 深呼吸 (一生)
(足の裏から吸って、吐くイメージで効果大)

チューニング広場

第十二回定期演奏会の結果について

去る一月十五日の練習後、第十二回定期演奏会実行委員会は最後の打ち合わせを行いました。席上、演奏会の開催結果として当日の入場者数、実行委員会特別会計の収支決算、来場者及び団員アンケートの結果が報告されました。主な内容は下記のとおりです。詳細については、後日説明の機会があるかと思ひますのでそちらに譲ります。なお、これらの内容は十九日開催の役員会にも報告されております。

第十三回定期演奏会の

実行委員が決まりました

来年度の第十三回定期演奏会に向けた新たな実行委員会のメンバーが決まりました。定期演奏会終了後の打ち上げの席でも発表されましたが、ここであらためてお知らせします。

《第十三回定期演奏会実行委員会》

- 阿部 薫
- 島田 治子
- 久光 秀樹
- 三浦 哲 (実行委員長)
- 志市谷 修

楽譜の管理について

団で使用する楽譜は、これまで勘米良さんのご好意で管理をしていただいておりますが、個人の負担とならない永続的な管理方法について役員会で協議した結果、トランクルームを借りることに決定し、十一月一日よりこの新たな方法に移行しております。

<第12回定期演奏会について>

- ・ 入場者数: 372名 (前年比 66名増。チケット半券の数による)
- ・ 収支決算: (収入) 454,425円 - (支出) 514,252円 = (差引き) ▲59,817円
- ・ 来場者アンケート (抜粋): 回答数 113人

【北海道シニア吹奏楽団について】

知っていた (73) 今回初めて知った (39)

【今回の演奏会は何で知りましたか】

新聞 (11) チラシ (19) ラジオ (0) 知人、友人 (62) その他 (20)

【今回の演奏会について】

面白かった (89) まあまあ良かった (15)

期待はずれだった (1) その他 (0)

【よろしければお客様の年齢を教えてください】

10代~20代 (9) 30代~40代 (23) 50代~60代 (57) 70代~80代 (21)

事務局長の

紹介したいこの一文

このたび、渡辺事務局長からシニア便りでぜひ紹介してほしいということで、以下の文章を託されました。江戸風俗研究者であり、漫画家としても活躍され、昨年七月に四十六歳の若さで亡くなられた故・杉浦日向子さんの「絶筆」とされる一文です。

『江戸は中高年が

生き生きしていた大人の時代』

杉浦 日向子

「江戸」は当時としては世界の最先端、じつにモダンな都市でした。というのも諸国人の情報と文化が入り乱れ、つねに新しい刺激の発信拠点だったからです。その意味で、私が今の東京で江戸を感じるのには、寄席や歌舞伎にはなく、むしろ渋谷や新宿のような複雑な町にいる時です。こうした複雑さが江戸の空気、とはいっても下品になると失敗で、ちよつと着崩したり、乱れ髪風にしたり、すれすれのところで袴を競い合う遊びが江戸人の心意気でした。また、仕事でも、能率だけを優先せず、逆に「日で終えられないのにわざわざ三日かけるような「ゆとり」をとり込んでいました。複雑な中でもくつろげる隙間を見つけていることが都会

人の経験と知恵、大人は江戸人の行き方です。ですから私は、渋谷などのカフェで人や町を眺めたり、屋下がりの蕎麦屋でくつろいだりしていると、江戸人のゆとりを感じていい気分になるのです。

「旅」も景色を堪能し名物を楽しみながら歩く長い道中そのものを指します。食生活も、「忙しいから蕎麦を食う」というのは現代人の発想で、蕎麦と鯉はスローフードでした。鯉屋は「旦那 どれにしますか」と生け簀の鯉を選はせてから料理するくらい。つまみを前にして小一時間待つ。蕎麦屋でも「蕎麦前」といわれるお酒を露払いに飲み、気持ちよくなつてから蕎麦をつるりと食べていました。今、江戸文化が見直されているのは、せせこましく生きている現代人が息切れしているからでしょう。江戸人は朝から昼過ぎまでしか動きませんでした。その分趣味で集まった「連」に複数所属し、囲碁や俳句などのサークル活動の方に余念がなかった。老若男女、武士も町人も入り混じって、誰もが身銭を切ってワリカで楽しんだのです。接待ゴルフなんてあり得ませんでした。江戸では前年の収入を上回らなくてもそれなりの生活ができたので、背伸びもしないし、欲もない。その有り余る時間から、歌舞音曲、釣り、盆栽、食い道楽など、さまざまに興味文

化が発達したのです。このゆとりこそ、変わらぬ価値を持つ銘品の数々を生んだゆえんなのです。

そして江戸は、生きてきた歳月や経験が価値を持ち、歳を重ねるほど有利な大人の世紀でした。泰平の世で、祖父母と孫の世代でも変わらない価値観が根底にあったからこそ、人生経験豊かな大人が生き生きと暮らしを楽しめる時代だったのです。今のように、中年以降の人が無理して若作りし、「女子供」ウケする価値観が優先されるのは悲しいことです。現代の中高年も江戸人のように人生の経験を生かした楽しみを開発して、悠々と遊んでみれば、若い人に「歳を取るのも悪くない」と思ってもらえるはずですよ。休みたい時に休み、「失うモノは何もない」ときままに生きた江戸はストレスレス社会でした。大工が道具を失くしても「親方に借りればいいや。身一つで何とかなるさ」と、反省なんかしないで、その場でストレスを解消していたのです。つまり、「持たない、悩まない、出世しない」という「三ない主義」。地位が上がれば責任も重くなるから、出世なんか「まっぴら」で「頭領とだけは呼ばれたくねえから、昼間っから、酒、喰らってんでい」と暖かい切る。逆に、出世する人は変人扱いされ、「あんな奴にや友達はいねえよ」といわれるほど。携帯電話に縛られているようじゃ、江戸っ子にはなれないってことです。私は、自分なりに「今日」を楽しめなければ、「明日」も楽しめないと思つて日々過してしまいます。そして、ゆとりを持って自由に暮らすことが、袴で気ままな江戸人に近づく生き方だと思つていきます。

編集後記

早いもので、第十二回定演からもう四ヶ月が経過しようとしています。前回よりも格段に上達した宮の森小学校の子供たち、打ち上げでの感激の涙が忘れられない村山さんのフルート・ソロ、「OH! イ・シニア」でのみんなの笑顔、客席からの予想以上の反応に驚いた筆者のラジオ体操実演などなど、いろいろな一コマが廻ってまいります。新たな実行委員会体制が発足し、定演を視野に入れた試奏曲も、続々と練習にかけられています。幕間の出し物の計画もあるのかなとか……さあ、今年はどうなドラマが生まれるのでしょうか？ 今から楽しみですね！

(編、首長)